氏　　名	齋藤圭子（サイトウケイコ）
学位の種類	博　士　（音楽学）
学位記番号	博　音　第 225 号
学位授与年月日	平成25年 3 月25日
学位論文等題目	〈論文〉無調音楽のためのソルフェージュ ── A. シェーンベルク《ピアノ組曲》op.25を教材として ──
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学　准教授　（音楽学部）　照屋正樹
（副査）	〃　〃　（〃）　ローラン・テシュネ
（〃）	〃　教授　（〃）　片山千佳子
（〃）	〃　准教授　（〃）　山下薫子

（論文内容の要旨）

本研究では、A.シェーンベルクの《ピアノ組曲 *6 Suite für Klavier*》op.25の全曲をソルフェージュ教材として用い、無調音楽の魅力を理解し、演奏することを目的とした学習法を提案する。

20世紀以降の作品においては、楽曲の様式や用いられる音楽語法、演奏に要求される楽器の演奏技能の拡大が著しい。そのため、19世紀以前の楽曲における学習事項のみでは、20世紀以降の作品を十分に理解することは不可能である。そこで、20世紀以降の作品を学ぶための学習法が不可欠であると考え、その新たな学習法を教材とともに提案した。本研究で提案した学習法と教材は、楽曲に用いられる複雑なリズム、調性によらない音組織による音形の実践といった基礎事項から、楽曲の理解と音楽表現といった応用的な内容に至るまでを一貫して学習することを目指すものである。

第１章では、まず、無調音楽に対する教育の現状を推測し、その問題点を指摘した。次に、現在出版されている無調音楽のための各種教材、理論書、学術論文の内容について先行研究批判を行い、これらを用いて学習することのできる内容と､これらの著作に欠如していると思われる内容について考察した。さらに、シェーンベルクとウェーベルンの言説から、彼らの12音技法に対する考え方を明らかにし、楽曲に相応しいアプローチを導き出した。

第２章では､《ピアノ組曲》全曲および使用音列を、第３章で行う学習法の提案に必要な内容に焦点を絞って分析し､ソルフェージュの学習の対象となり得る要素を抽出した｡さらに抽出した要素をリズム、音列と音、アーティキュレーションとデュナーミク、表現の４項目に分類し、それぞれの項目における学習の要点を明らかにした。

第３章では､《ピアノ組曲》全曲を教材として用い、第２章で抽出・分類した要素を学習するためのソルフェージュ課題を作成し､学習法を提案した｡前述のリズムや音組織に関する学習の他､声部の増減・交差・音域の重複を伴う対位的書法による声部の知覚と認識、旋律の多彩な表情、頻繁な速度変化などを、リズム練習・視唱練習・聴音を用いて学習する。様々な要素を含む応用課題には、それらを実施するための予備練習を設け、予習および復習内容を具体的に記し、学習が段階的に進められるよう配慮した。さらに、本研究における学習法の大きな特徴である楽曲解釈と音楽表現のための学習を設けた。学習者自らが分析・解釈・表現を行うように配慮し、旋律やフレーズの分析と分析事項に裏づけられた解釈および表現を導くためのヒントとなる質問を設定した。ここでは、多様な音楽語法の用いられる無聴音楽へのアプローチの一例を示すことができた。

第４章では、筆者が授業を担当する音楽大学の２つのクラスにおいて《ピアノ組曲》を用いた授業を

実施し、本論文における学習法および教材の有用性を検証した。その結果、複数の項目において、指導と学習により学生達の知覚が促され、認識が深まり、実践能力の向上が認められた。特に表現においては、フレーズや旋律への理解が深まるとともに、より豊かな表現へと飛躍的に変化した。これにより、本研究における、楽曲解釈および音楽表現とそのために必要な分析を含めた学習の有用性および重要性が明らかになった。

全曲が12音技法により書かれた最初の作品として、これまで多くの理論家や作曲家から注目されてきた《ピアノ組曲》に対し、本論文では、演奏に必要な学習要素を抽出するための楽曲分析を行い、この作品の芸術作品としての価値を再確認した。さらに、ただ１つの音列しか用いられていないにも関わらず多様な表情を有するこの作品からは、ロマン派以前の楽曲と同様のアプローチを用いつつ20世紀以降の音楽に共通する多くの要素を学べること、音列の用法の様々な可能性および12音技法を用いる意義を見出せること、12音音楽の魅力を十分に味わえることなどを指摘し、この作品に教育上の意義があることを発見した。

具体的なソルフェージュ教育の観点からは、19世紀以前の作品を用いたフォルマシオン・ミュジカルと20世紀以降の作品を用いたフォルマシオン・ミュジカルの役割の相違点を示し、20世紀以降の作品に対して、この学習法を用いることの有用性を明らかにした。

普遍化することのできる要素が少ない20世紀以降の作品に対応するためには、ソルフェージュにおいて異なる様式や音楽語法による楽曲を学び､楽曲分析や楽曲解釈のための視点を養うことが有益である。本研究では、A.シェーンベルクの《ピアノ組曲》を用いて、この視点の一部を具体的に示すとともに、20世紀以降の作品の学習に対するソルフェージュ教育のあり方、ソルフェージュ教育の担うべき役割を明確にした。

（総合審査結果の要旨）

本論文の目的は、無調音楽を理解し、演奏するための学習法と教材を提案することにある。

無調音楽に関する著作は多く存在するが、それらのほとんどは、作曲家や楽曲の様式に関するもの、または楽曲分析に関するものである。また､19世紀以前の西洋音楽は､調性構造の中で発展して来たが、20世紀に入ると作品の様式が多様化し19世紀以前には見られなかった語法、演奏技術が拡大し続けている。

こうした状況下、学習者がリズム、音程等個々の要素の修得のみにとどまらず、楽曲の魅力を十分に理解し表現することを目的とした、新たな学習法と教材が必要となるという視点に立ち、シェーンベルクの《ピアノ組曲 *6 Suite für Klavier*》op.25全曲を教材として用い、学習法を提示している。

この論文の中核をなす教案部分については、全６曲とも同じ音列が用いられているにもかかわらず、構造や解釈、表現がそれぞれの曲で異なる点が十分考慮され、基礎的な音程練習、リズム練習と共に、応用課題が設定されている。とりわけ斬新なのは、予習及び復習課題を設定し授業の効率化を図ったことと、楽曲解釈および音楽表現とそのために必要な分析を含めた学習にまで言及していることであり、この教案の部分だけでも労作と言える｡審査会では先生方の所見に見られるような問題点が指摘された。しかしながら、上述したように無調の作品に対するソルフェージュ学習法の提示、及びその教育上の意義、役割を明らかにした点を評価し、審査会では合格との結論に至った。